

カントの『学部の争い』の宗教論

村野 宣男

1 序

イマヌエル・カント (Immanuel Kant 1724-1804) は、1793年に『単なる理性の限界内における宗教』(Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft) を出版した。“単なる” (bloß) とは、勿論“純粹なる” という意味である。ここでカントは教会批判を試みている。神に対しては、二つの態度がある。一つは、道徳的であれという神の意にひたすら適うようにするところの道徳的奉仕であり、他は、自分の願望を充そうとして、儀礼的手段を通して神に働きかける態度である。儀礼的行為には、何等道徳性は見出されず、その行為の動機は、自己の願望を充そうとする現世利益的なものに外ならない。カントは、このような行為を魔術 (das Zaubern) と名付けている。¹⁾そしてカントは、教会における僧侶階級たるものは、“道徳的原理ではなく、形式的な祈り・信仰箇条・規律を事とするところの呪物奉仕 (Fetischdienst)”²⁾に携っているとする。未開社会では、靈力を持つと考えられている多少人工的に手が加えられた自然物たる石や木片等 (呪物) が呪術において使用されるが、神も同様に扱われているとされるのである。僧侶の行うことは、外観上は未開宗教とは異なるが、本質は、神の靈力によって何等かの現世利益的効果を得ようとするものであるとカントは考える。

このような教会批判は、教会が大きな力を持つ時代にあっては、社会批判でもある。カ

ントの住む東プロイセンのケーニヒスベルグ (Königsberg 現在ではソ連領で Kaliningrad といわれている。) では、学問に関して比較的寛容であったフリードリッヒ大王 (1712-86) の死後、後継者となったフリードリッヒ・ウィルヘルムⅡ世 (Friedrich Wilhelm II, 1744-1797, 在位 1786-97) は、抑圧策を取った。『単なる理性の限界内における宗教』は、1793年に出版されているが、ケーニヒスベルグの大学で検閲を受けずに、ワイマール公国のイエナ (Jena) 大学の哲学部で許可を取るという経緯があった。しかし、書物それ自体はケーニヒスベルグの書店を通して世にあらわれた。これに対してウィルヘルムⅡ世は、1794年書簡を通して、勅令を出し“汝は、聖書やキリスト教の多くの主要教義を歪曲し、品位を落すために汝の哲学を濫用した。”³⁾とし、特に『単なる理性の限界内における宗教』に言及している。カントには、宗教に関する著述ならびに講義が禁じられたのである。カントは、このような抑圧の下に沈黙を守らざるを得なかったが、ウィルヘルムⅡ世の死の翌年、1798年に、『学部の争い』(Der Streit der Fakultäten) を出版し、ウィルヘルムⅡ世の勅令、並びにそれへの返信を公表して、自己の哲学的・理性的立場を再確認しているのである。

ウィルヘルムⅡ世の勅令に対してカントは、批判されているように聖書やキリスト教の品位を傷つけるところか尊敬の意を持っていると弁明している。聖書は、道徳的理性に悖るものではなく、“ここで証明されている

ところの聖書と道徳的理性信仰との一致は、聖書に関して最良にして永続的な特質なのである。何となれば、聖書に関しての従来からの学問ではなく、まさしくこの理性的信仰を通して退廃したキリスト教は常に再建されてきたのであり、又、未来において生ずるであろう同様の退廃にさいしても、この理性的信仰によって生れかわることができるであろうからである。”⁴⁾ カントは、ここで聖書の価値を認めながら、批判の手綱をゆるめてはいない。現在に至るまでの従来の聖書学者は道徳的理性に従っていないこと、又、キリスト教が退廃堕落してきたし現にしていることが言外に主張されている。このような内容の書簡の公表がウィルヘルムⅡ世の生存中に可能でなかったことは当然であろう。

『学部之争い』では、まず第一にカントは理性的立場を貫こうとしている。この理性的立場は、道徳的立場であるが、同時に宗教的立場も理性に通ずるものとして理解されている。『学部之争い』で、宗教に関して問題になる第二の点は、聖書とキリスト教である。カントは、聖書という具体的なものに関心をもつ。聖書に関しては理性的視点から批判するという自由な立場を保持しながら、聖書の本質は理性に一致すると考えるが、又、同時に聖書それ自体が人間の分析を超えた何ものかとして捉えられている。本稿では、宗教と理性の問題、聖書とキリスト教の問題の二つを取り上げて考察してみたい。

2 問題提起

カントによると学部には、三つの上級(ober)学部と、一つの下級(unter)学部とがあり、上級は生活の実際的場面にかかわるもので、神学、法学、医学が挙げられ、下級は哲学部である。『学部之争い』では、上級学部のそれぞれと下級との関係が論ぜられ

ている。本稿では、神学部と哲学部の関係を問題とするが、法学・医学もその根底においては哲学が問題とされねばならないとカントは考えている。哲学的視点があってこそ上級の学部は、その方向性を定めることができるのである。“大学には、哲学部が設けられねばならない。哲学部は、上級の三者を統制することによって三者に利益をもたらすのである。何故ならば真理(学問一般の本質的にして第一の規定性)こそが最も肝要だからである。”⁵⁾ 哲学部に関しては更に次のように述べられる。“大学における学者組織には、尚一つの学部が必要である。それはその学説に関しては、政府の命令から自由であり、それはいかなる命令も与えない代りに、全てを判断する自由を持っており、その自由な学問的関心、すなわち真理とかかわっているのである。そして、そこでは、理性が自由に語る権限が与えられている。このような学部なしには、真理は、日の目を見ることはないだろう(真理は政府にとっては、損害をもたらすものだが)。理性は、その本性上自由であり、何ものかを真理と見なせという強制には従わないのである。(理性には、強制はなく単に自由なる信念があるのみである。)”⁶⁾ カントは、神学者が非哲学的に振舞っている現実を暴露する。一般の人々は、無知の故に、迷信や奇跡を信じている。神学者や教会の職務にある僧職者は、このような一般の人達の無知を利用している。政府も又、共謀して自己の利益を追求している。カントは、宗教的实践者ばかりでなく、政府をも正しい方向に導くものとして哲学の必要を説いている。このように考えると、哲学部の方が、価値的に上級であると考えられはしまいか。このことに関してカントは次のように述べる。“このような学部は(自由という)大きな特権にもかかわらず、下級と名づけられている。その理由は次のような人間の性向に求められる。すなわち、上

級の学部の人々が、自由である下級の人より高貴であるとされるのは、この人達が命令すること、ことができるからである、しかしこの人達は実際は他に従属していて自由ではないのであるが。”⁷⁾ (傍点筆者) カントは、自己の置かれている事情を考慮して、神学者達を上級に属するものとするものの、このように痛烈な皮肉を浴びせているのである。

哲学は、具体的宗教活動を然るべき方向に導く役割をなす。具体的宗教活動には複数の形態があっても哲学の原理は一つである。カントと諸々の宗教形態の根底に存する“宗教”(Religion)という概念を呈示しつつ次のように述べる。“聖書神学者とは、教会信仰の神学者である。教会信仰は、他者の恣意により生れた律法に基づいているものである。一方合理的な神学者は、宗教的信仰(Religionsglaube)を持つ理性的な神学者である。宗教的信仰は、人間の理性から発展したところの内的規則に基づいているのである。宗教が一定の原則(その起源が非常に高邁なものであるにしても)に基づいているということは、宗教(Religion)という概念から明らかである。諸々の神的啓示の諸教義の総体(これは神学といわれるが)ではなく、神的命令としての義務一般(主観的には義務に従うところの格率)の総体が宗教である。宗教は、内容と対象に関しては、道徳と異なるところはない。何となれば、宗教も義務に関わるからである。宗教と道徳の相異は、単に形式である。つまり、宗教では神性による規則の立て方が異なるのである。すなわち、宗教では、宗教から生れた神という概念によって、人間の義務の道徳的成就のために人間の意志に影響を与える。したがって、宗教は唯一であり、多様の宗教は存在しない。ただし、神的啓示への信仰や教義にも次のような意味がある。すなわち、これら理性によるものではない神的意志に関しての種々の形態の感性的表現は、人間

の心情に影響を与えることができるということである。そして、われわれの知るかぎり、キリスト教が最も適しいものである。”⁸⁾ まずカントが、Religion(宗教)という概念を明確にしていることが興味深い。この語はスコラ哲学においても religio として用いられていたものであるが、ここでは、諸宗教の根底にある原理という普遍的意味が与えられている。ここには明らかに宗教学的発想が見られる。さて、以上の引用において、宗教を回ってカントが問題とするところのものが明らかに見られる。まず第一に理性の問題である。ここにいわれる理性は、道徳を内容とするが、道徳を通して宗教にもかかわっている。宗教は理性の一つの立法(eine Gesetzgebung der Vernunft)とされる。カントにとって“理性”とは何かということは、あまりにも大きな問題であるが、『学部争い』に示唆されているところから若干の考察を試みたい。第二に問題とされるところのものは、具体的宗教形態のもつ意味である。カントは、理性の立場から、種々の宗教形態を超越した“宗教”を考えるが、同時に感性的形態を伴った具体的宗教形態の意味を認める。感性的形態を通してはじめて理性的宗教は表現される。感性的形態はこのように媒介的役割とみられると同時に神的啓示という超越的なものとしてみられている。聖書を回ってこのような問題が生じてくるのである。

3 宗教と理性

カントの理性の概念への問は、非常に大きなテーマであるが、ここでは、カントが宗教にまで理性の概念を拡大していることについて考察してみたい。認識を成立させるところにも理性が働く。『純粹理性批判』におけるいわば理論理性の役割がここにある。カントによると、理論理性は、二律排反という壁に

つきあたり、自由・靈魂の不滅・神という理論理性では処理し切れない課題が提出されるという。しかしながら、これらは実践的次元で取り上げられることによって意味を持つことができることとされる。理論理性と実践理性のこのような関係の妥当性ということになると込み入った吟味が要請されると考えられるが、カントの理性の概念には、“秩序をもたらす力”という意味が明らかに見て取れる。自然科学的認識が確立される以前は、人間は自然に関して混乱した知識しか持ち得なかったのである。しかるに実践的行為において、道徳的視点を欠くならば、いかに正確な認識があっても混乱を惹起することであろう。人間の認識ならびに実践的行為においては、混乱を惹き起こす力と、秩序をもたらす力の双方が考えられる。前者が、感覚・感情・欲望であるとするならば、後者が理性である。実践的行為において秩序をもたらす力は道徳である。カントは、道徳的であることは愛を持つことであると考えている。しかし、この愛は秩序をもたらすところのものでなければならぬ。したがって感情的な次元で理解されてはならない。一定の原則を持たない感情は、一見美的に見えても、混乱を惹起する可能性をもつ。ここにカントが道徳に関しての諸々の原則、例えば、人格の尊厳、仮言的令法に対しての定言的令法、道徳的法則等を持ち出す理由がある。愛は、このような条件によって篩をかけられることによって理性的な愛となる、カントは、自己愛 (Selbstliebe) を捨てた公平無私な愛を道徳の根底におく。そして、果してわれわれの愛が、このような内容に適合するかどうかと試すために種々の哲学的基準たる篩を提出する。単に篩だけを見てカントの道徳論を、無味乾燥なものと思いついてはならない。⁹⁾

宗教に関してもカントは同様の考え方をしている。宗教的信仰には感情が支配しうるの

であり、感情が支配するとき世俗的欲望が入りこみ混乱を惹起することがある。カントは、宗教の混乱を理性によって秩序づけようと試みるのである。宗教は不安の解消のために存するという見解に対してカントは次のように述べる。“もし宗教が不安 (Furcht) や欲望 (Hoffnung) によって魂の中に強制されたものとして偽って立てられるなら、それは真実すなわち宗教 (Religion) に反するのである。”¹⁰⁾ ここには、明らかにヒュームの宗教観に対する批判がある。¹¹⁾ カントによると、単に感情によってたてられた宗教の概念は、丁度、感情の視点からたてられた愛が真の愛ではないように、宗教として装われたもの (erkünstlen) にすぎないとされる。カントにおける宗教の概念には、理性的であることが条件とされており、一般に考えられているものより限定的である。宗教的であることは理性的なのである。それでは、宗教に関する限り理性的とはどういうことを意味するのだろうか。理性は認識と実践の双方にかかわる。例えば、聖書に関していえば、聖書の内容が真実か否かという認識上の問と、実践的側面から見て道徳的かという問がたてられる。教会における聖書神学者はこのような学問をたてることなく、単に教義が論理的に矛盾していなければ問題は生じない。理性的たる宗教的信仰の場合には事情がことなる。“しかし、宗教的信仰のためには、真理による証明が必要であり、それは単なる教会教義 (それは神の言葉であるとされるが) によって証明されるものではなく、常に歴史によって証明されねばならない。しかし、歴史はそれ自身神啓示とはされ得ないのである。ところで宗教的信仰は、行為の道徳性に向けられているのであるが、この宗教的信仰においては、歴史的教義はいかなる道徳的価値・非価値とももたないのであり、宗教的信仰にとって関係のないもの (Adiaphora) なのである。”¹²⁾

ここでカントは、歴史に関しての真理の問題に言及している。聖書の記述を信仰の立場から啓示として受けとることなく、歴史的事実であるかどうかという目でもっている。カントはここで事実の問題と価値の問題を区分している。しかし、何が事実であるかということは宗教的価値にとってはアディアボラであるとされる。カントには、たしかに聖書が認識的事実の視点から理性的か否かという関心もあった。そして、この点に関してカントは懐疑的である。しかし、カントの実際の関心は歴史的事実ではない。たとえ歴史的事実の観点から聖書が正しくなくとも、聖書に書かれていることが道徳的であるということがカントにとって問題なのである。カントは聖書に書かれていることを事実としてではなく道徳的に解釈することによってその価値を見ようとする（この点に関しては次節で詳しく論ずる）聖書が道徳的であるということは、聖書が真に宗教的であることでもある。そもそも宗教は、価値の領域の問題であり、カントが宗教と理性を問題とするときの理性は、道徳的観点からである。宗教が道徳であることによって、宗教における秩序が確保されるのである。

道徳との関連性のない宗教は、宗教を装っているものにすぎない。神は道徳と関連づけられてはじめてその面目を保つことができる。しかるに神はどのようにして道徳と関連づけられているのか。そもそも道徳は当為（Sollen）の論理の上に成立し、強制的なる他者を予想するものであるが、カントによれば、道徳法則は神聖であるとされ、それは“神的命令としての道徳法則”¹³⁾であるという。道徳があり、宗教があり双方が関連づけられるというよりは、最初から両者は一体化されているものであり、宗教的神聖性なくしては道徳そのものが成立し得ないとも考えられる。道徳における当為（Sollen）は何等かの

超越的基盤を要求しているからである。しかし、全ての神は、このように道徳と関連づけられているとは限らない。カントにいわせれば、非道徳的神は、宗教的であるに値しないことになる。

道徳法則は、精神に統一を与える実践理性の原理である。これは神の命令ともされている。理性は人間内在のものである。神を人間外在のものとするれば、内在たる理性の原理に従うことが同時に外在たる神に従うことになる。ここに同時に内在と外在に従うという矛盾が生ずる。実際カントにおいてわれわれは、神と理性が同一視されたり区別されたりしているのを見るのである。カントは次のように述べる。“われわれの中の神（der Gott in uns）が聖書の解釈者である。すなわち、われわれは、悟性と理性を通してわれわれに話しかけるものしか理解しないし、われわれに告げられる教義の神性も、それが純粹に道徳的で真である限り理性によって知られるのである。”¹⁴⁾（傍点筆者）又、次のようにもいわれる、“われわれの（道徳的・実践的）理性を通して語りかけるところの神は、聖書を真に理性的に解釈するのであり、このような神以外に神の言葉を正しく解釈する者（例えば歴史的方法で解釈する者）は存在しない。何故ならば、宗教は純粹に理性的な事柄だからである。”¹⁵⁾（傍点筆者）ここでは、人間の道徳的理性と神とが同一視されている。神は人間に内在するものと考えられている。しかし、神は人間と同一視されるものではなく、人間を超越し、人間に助力を与えるものであるとも考えられている。“自己の良心を前にして、自己を正しくするための行為が十分でない場合、理性は、自己の不完性は超自然的助力によって補われると当然信ずることができる”¹⁶⁾（傍点筆者）といわれる。さきに、理性は神と同一視され、人間の自己に内在化されたのであるが、ここでは、神は自己の外

に置かれている。しかるに、このような関係が妥当であることを更に理性が判断しているのである。この場合の理性は、神と同一視された理性が更に神の下に置かれる関係を見ているのである。そしてこのような理性の立場は人間精神に高い統一を与えている。翻って考えてみると、カントは『純粹理性批判』において、理性の限界を定めたはずである。“私は信仰に場所を与えるために知を捨てねばならなかった”¹⁷⁾として、理性が宗教の問題にかかわらないように警告を発した。しかし、理性は道徳的意味をもつようになり、更には『理性の限界内における宗教』において、捨てられた筈の理性の立場が宗教において取り上げられている。ここには、理性が“統一を与える力”であることが明らかに見て取れる。

4 キリスト教の問題

カントは道徳的理性原理たる宗教の概念を提示したが概念は受肉化してはじめてわれわれの知るところになる。カントはキリスト教を宗教の最も適しい形態と考えたのであった。カントは、聖書を特別視している。しかし、それは、聖書の字義の背後には理性が隠れていて、聖書は真に理性的宗教であるという理由だけからではないように思われる。聖書の具体的字義に生きた意味があるとカントは考えているのである。啓示を理性で解釈しながら、同時に啓示それ自体の意義を認めていると思われる。ここにも宗教と理性の問題が存する。

重複にはなるが、カントの聖書解釈の基本的立場は次の通りである。“聖書解釈には、権威的 (authentisch) と教義的 (doktrinal) の二つの方法があるとされた後に、次のように述べられる。“前者の場合、解釈は、作者の意味に字義通り、文献学的に (philologisch) に従わねばならないが、後者の場合は、聖書

学者は、聖書に対して哲学的に (philosophisch) (門弟の教育のためにも) 道徳的・実践的観点から解釈する自由を持つのである。何となれば、単なる歴史的命題への信仰は、それ自身生命をもたないからである。前者の立場は、たしかに、聖書学者あるいは間接的に一般の人々にとってプラグマティックな意味で十分重要であるかもしれないが、道徳的によい人間を形成するという宗教的教義の本来の目標にとっては欠陥があるばかりでなく避けられなくてはならない。”¹⁸⁾このように、聖書に関する文献学的解釈が退けられ哲学的解釈が取られる。カントは、聖書に関して道徳的・理性的宗教を喚起するところの契機 (Veranlassung)¹⁹⁾としての役割を担わせるものの字義通りの歴史的叙述としての意味には否定的である。聖書の叙述は、道徳的原理を表明するものという観点から解釈されねばならない。つまり、その原理を具体的に受肉化したものとして聖書は存在する。原理は、受肉化されてはじめてわれわれの知るところのものになるからである。このようにカントは、聖書の意義を認めると共に教会の必要性も説く、宗教が社会的かわりを持つ以上教会が必要とされるのである。“人間のいない衣服 (宗教のない教会)”は好ましくないが、“衣服のない人間 (教会のない宗教)”も抽象である。²⁰⁾としている。カントは、生きた姿としての聖書の価値を認めるのであるが、聖書は理性的道徳原理を表現する媒体として位置づけられている。カントはまず、聖書に関して、“宗教的信仰の観点においては (この人あるいはあの人、又は、この時代又はあの時代にとっての) 単なる感性的媒体として有益なのである”²¹⁾という。そして、聖書の価値の証明は“聖書の編者の神学によるのではなく (何となれば聖書の編者は常に可能な誤りにさらされた人間であったから) 聖書の内容が、一般の人々から出た

教師によって説かれたとき、一般の人々に及ぼす効果（Wirkung）によって考察されるのである。これらの教師は（学問的には）無知である故にこの証明は、普遍的な全ての一般的な人々に存在するところの理性宗教（Vernunftreligion）からなされたものと考えることができる。この理性宗教は、まさしくこの単純性の故に、人々の心に広く強い影響を与えるのである。”²²⁾カントは、聖書の字句の歴史的意味を認めないが、それが人々の心に及ぼす効果（Wirkung）は認める。いわばプラグマティックな観点から聖書を評価しているものと考えられる。しかも聖書の正当なる評価は、学者の判断ではなく一般の人々の中にひそむ共通の理性によるものであるとしている。カントは一般の人々の常識的判断を重んじることがよくある。例えば、カントの実践理性の学的体系は、複雑なものであるが、善悪に関しての道徳的判断は、左と右とを区別するようにどの人でも行っているものであり学者に限られるものではないと考える。²³⁾ここには、カントの哲学が抽象的ではなく、現実性の中に足を下しており、生きたものであることが知られるのである。このような精神は、アメリカのウィリアム・ジェイムズ（William James 1842-1910）が主張した“プラグマティズム”に通ずるところがある。プラグマティズムでは、観念の意味を文字通りのところからではなく、それが与えるところの実際上の効果（practical effect）に求めるのであり、その効果の判断は、われわれの生きた心に任されているのである。²⁴⁾

以上のようにカントは、聖書をプラグマティックといえるほどの方法で解釈しているのであるが、果たしてこのようにカントの聖書解釈を理解してよいものであろうか。次の引用でカントは、宗教は抽象的原理に止まることなく受肉化されなければならないと述べて、啓示について語っているのである。“キ

リスト教は、理性に基づくところの宗教の理念であり、その限り自然的である。キリスト教は又、宗教を人々の間に導入する手段として聖書を持つ。聖書の起源は超自然的であると考えられ、聖書は、理性の道徳的啓示を世に広め且つ内面化させるために必要である限りにおいて宗教の媒体なのである。そしてこの媒体は、又、超自然的啓示であるとされてよい。さて宗教は、いかなる啓示も容認しない場合には、単に自然主義的（Naturalistisch）と名づけることができる。キリスト教の場合は、自然的（natürlich）であるかもしれないが、自然主義的ではない。なぜなら、聖書は宗教を導入する超自然的手段であるし、又、宗教を広めるところの教会を設立するための超自然的手段であることは明らかであるからである”²⁵⁾宗教の原理は受肉化されなければならないが、カントによるとそこには超自然的啓示の有無が問題となり、キリスト教の場合は超自然的啓示が存する自然的（natürlich）形態であるとされる。聖書は道徳的理性の媒体であるが、それは超自然的媒体である。われわれの聖書に対するかわり方は、他の日常的なものであるのと全く次元を異にするのである。ここから、聖書をプラグマティックに解釈する態度そのものに矛盾が生ずるのではないかと考えられる。²⁶⁾又、カントの聖書神学の評価をみてもカントが啓示を重んじている側面があることが知られる。カントは、聖書を字義通り啓示として受け入れる聖書神学者の立場を否定している筈なのであるが、次のような聖書神学者に対する見解は、否定的に扱われているとは考えられない。カントは次のように述べる。“神が存在することを聖書神学者は、聖書を読むことによって証明する。聖書において神は、神の本性から語りかけているのである。（理性は、聖書と共に歩むことはできない。例えば、そこには三位一体の奥義がみられる。）

聖書神学者は神が聖書を通して語りかけたことを歴史的事実として証明することはできないし、又、してはならない。何故ならそれは哲学部の任務だからである。聖書神学者はそれ故、神が語りかけていることを信仰の事柄として、聖書に対しての神性感情（それは、絶対に証明されたり、説明されたりするものではないが）に根拠づけるのである。聖書神学者は、学者にもこのように説明する。一般の人々における公けの説教においては、（文字通りに取られた意味での）神聖性に対して疑問を提出してはならない。何故ならば、一般の人々は問題を学問的事柄としては理解しなく、この間によって出すぎた穿鑿と疑網の中に巻きこまれてしまうだろうからである。人々はこのことに関しては、指導者に頼った方がはるかによい。”²⁷⁾カントがここで、一般の人々が聖書を学問的に扱うことに批判的であるのは興味深い。これは、聖書神学者の立場の正当性を認めていることなのである。聖書神学者は、聖書を文字通り受け取る立場をとっているが、それはそれとして絶対的価値があるとカントは考える。聖書神学の立場は、聖書に対しての神性の感情に基づいているのであり、それは証明されたり説明されるものではない。カントが一般の人々の精神を低く見ていないことは常識を重んずる立場から明らかである。しかし、分析は混乱をもたらす。聖書神学者の立場には、分析以前の真理があるとカントは見るのである。カントは一般の人々（Volk）とは異り、哲学的分析の方向を選んだのであった。この方向を取ることによって、聖書の歴史的意味に疑問が持たれることになる。カントのような哲学者は、ここで迷うことなく聖書の叙述の背後に存する道徳的意味、又、それを語りかけるところの神を見ることができた。しかし、一般の人々は、そこで迷うこともあるであろう。時の政府が警戒したのもこのことであつたと思わ

れる。カントもこれを知っており、『単なる理性の限界内における宗教』は学者のための書物であり、一般の人々のものではないとしている。²⁸⁾問題は、カント自身の中でどのように論理が展開し、組立てられて行ったかである。カントが、聖書をあまりにも理性的側面に片寄って解釈していることは否むことができない。しかし一方では、聖書は啓示であるとカントは考える。カントの思索は、聖書へのかかわりという生きた次元で行われている。神への信仰の中で行われているのである。カントは、聖書は、宗教を最も適切に具現化しているものと言うが、そもそも、まず理性の立場があり次に聖書を理性で解釈するという関係があるのではない。聖書があつて理性がある。実践理性の原理は、聖書なしに考えられるものではない。たしかにカントは、聖書を歴史的事実としては疑問視している。しかし、実践理性の立場から聖書を道徳的理性の媒体として、“そしてこの媒体は又、超自然的啓示であるとされてもよい”とも言う。すなわち、実践的立場からの聖書とのかかわりは、あらゆる分析を超えたものであり、カントの実践哲学の原点となすものであると考えられる。啓示は超自然的かかわりにおけるものであるが、これは、われわれの分析を超えた一つの事実（ein Faktum）なのである。このような啓示を通してはじめてわれわれの中に実践理性が芽生えるといえる。われわれには、a priori に実践理性が存するとしても、何ものかとのかかわりなしには、それは働くものではない。先に、“神と同一視されている理性が、更に神の下に置かれている関係”を見ている理性について述べたが、啓示と理性の双方について述べているカントには、このような高次の理性が働いているものと考えることができよう。

注

カントの著作の引用は, Kants gesammelte Schriften. Herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften による, 書名の次に表記された頁はこの著作集のものである。

- 1) Kant, *Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft* (Bd. VI) S.177.
- 2) *ibid*, s. 179.
- 3) Kant, *Der Streit der Fakultäten* (Bd. 7) S. 6.
- 4) *ibid*, s. 9.
- 5) *ibid*, s. 28.
- 6) *ibid*, s. 198.
- 7) *ibid*, s. 20.
- 8) *ibid*, s. 36.
- 9) 拙稿「カントにおける道徳法則の意味」
文教大学女子短期大学部研究紀要第30集, 1986, 参照
- 10) Kant, *Der Streit der Fakultäten*, s. 42.
- 11) ヒュームによると, 人間は不安 (fear) を持つものであり, これから逃れ希望 (hope) を持つために超自然的力たる宗教が必要であると説いた。ここで宗教は感情的次元から解釈されており, 必ずしも道徳的でないところにヒュームの批判がある。拙論「ヒュームにおける道徳と宗教」, 『解脱と救済』, 楠正弘編, 平楽寺書店1983年参照。
- 12) Kant, *Der Streit der Fakultäten*, s. 46f.
- 13) Kant, *Die Religion*, s. 42.
- 14) Kant, *Der Streit der Fakultäten*, s. 48.
- 15) *ibid*, s. 67.
- 16) *ibid*, s. 43f.
- 17) Kant, *Die Kritik der reinen Vernunft* (Bd. 3) S. 19.
- 18) Kant, *Der Streit der Fakultäten*, s. 66.
- 19) *ibid*, s. 67.
- 20) *ibid*, s. 53.
- 21) *ibid*, s. 37.
- 22) Kant, *Die Kritik der praktischen Vernunft* (Bd. 5) S. 155.
- 23) *ibid*, s. 63f.
- 24) William James, *Pragmatism*, The works of William James, Harvard University Press, 1975参照。
- 25) Kant, *Der Streit der Fakultäten*, s. 44f.
- 26) ジェイムズは『プラグマティズム』において宗教論も展開しており, 道徳的立場と宗教的立場の矛盾葛藤の問題を扱っている。
- 27) Kant, *Der Streit der Fakultäten*, s. 23f.
- 28) *ibid*, s. 7 f.